

〔論文〕

## 教育者と子どもとの教育関係

—ヤヌス・コルチャックの教育思想を手がかりに—

國原 幸一郎

名古屋学院大学現代社会学部

### 要 旨

本稿では、ヤヌス・コルチャック（以下、コルチャックと記す）の教育思想を手がかりとして、教育者と子どもとの教育関係について考察する。まず、彼の教育思想の歴史的背景や作品から子ども理解と子どもの権利について整理し、次に教職課程の学生に視聴させた「コルチャック先生」のコメントと、田中（2016）も手がかりにして、教育者と子どもとの教育関係を図示することを試みた。当時は、戦争・革命・ユダヤ人迫害の影響下で、子どもへの配慮ができない多くの大人との関わりにより、子どもは大人になっていった。現在においても、戦争や貧困、DV やネグレクトなど、子どもを取り巻く環境は決してよいとはいえない。教育者が、子どもとどう関わり、教え導くのかという課題に対し、対処療法的な方法を導くのではなく、コルチャックなどの教育的知見から、現代の教育課題にどう結びつけられるのかを示そうとした。

キーワード：教育者 子ども コルチャック 教育関係 内なる声

## The relationship between educators and children through Janusz Korczak's educational philosophy

Koichiro KUNIHARA

Faculty of Contemporary Social Studies  
Nagoya Gakuin University

## 1. はじめに

本稿では、ヤヌス・コルチャック (Janusz Korczak, 1878-1942, 本名はヘンリク・ゴルトシュミット (Henryk Goldszmit), 以下, コルチャックか彼という) の教育思想を手がかりとして, 教育者と子どもとの教育関係について考察する。

第一次世界大戦と第二次世界大戦において, ポーランドでは多くの市民が犠牲となった。この国は, ナチス・ドイツの被害国であるが, 同時にユダヤ人に対する加害国であるという二面性を持っている。

2022 年は, ロシアのウクライナへの侵攻により, 戦闘員だけでなく, 多くの市民の生命や財産などが奪われ, 周辺国への避難を余儀なくされた者も多い。とくにポーランドの受け入れが多く, 社会的・経済的に弱い立場にある子どもにも深刻な影響を与えている。子どもの成長に関わる深刻な問題は, 戦時下にある国, 構造的な貧困に苦悩する発展途上国だけでなく, わが国でも DV やネグレクト, 子どもによる親の介護・看護, 家庭内貧困など, マスメディアでよく取りあげられている。

塚本 (2019) は, コルチャックと日本とのかかわりについて述べているが, 最初にコルチャックを紹介したのは劇作家の大井和雄である (1978 年)。大井は「マチウシ 1 世」の翻訳と演劇上演を成功させた。1990 年代には, 井上文勝が書いた脚本をもとに, 俳優の加藤剛が主役を演じた。1990 年にはポーランドの映画監督アンジェイ・ワイダ (Andrzej Wajda)<sup>1)</sup> の「コルチャック先生」が全国で上映された。その後, 彼の伝記も相次いで発行され, 1990 年代後半になると, 教育学研究者や文学者による

研究が見られるようになった。2003 年より, 日本教育学会のラウンドテーブル企画を利用した研究 (表 1) も進み, 日本におけるコルチャック研究の現状と課題, 教育実践の意義, 新教育運動, 子どもの権利条約との関係などをテーマとし, 研究者や市民の参加を得て, コルチャックについて継続的に研究が進められている。

本稿では, 小児科医, 児童文学者, 教育者, 孤児院の経営者・子どもたちの養育者であるコルチャック自身と彼の言説を解釈した研究者の作品や論文を取りあげ, 現在の教育問題にどのような示唆を与えているかを明らかにしたい。

彼が活躍した時代は, 子どもたちが, 戦争・革命・ユダヤ人迫害の中で, 自分自身への配慮に欠ける多くの大人との関わりにより, 大人になっていった。本稿では, 彼の著書や彼に関わる人物の研究論文などをもとに, 歴史的背景もふまえながら, 彼の考えや子どもたちの意識, 言動を整理し (第 2 章), 彼らの作品から子ども理解 (第 3 章) と子どもの権利 (第 4 章) について考察する。次に教職課程の学生に視聴させた「コルチャック先生」<sup>2)</sup> のコメントから学生の問題意識について述べ (第 5 章), 田中 (2016) のハイデgger の教育思想を手がかりとした教育関係と比較して (第 6 章), 教育者と子どもとの教育関係を図示することを試みてみたい。

塚本 (2004) は「コルチャックの思想は, 要約や概念化が非常に困難であり, それは, 彼が難解な概念を使わず, 個別具体的な説明で論理を展開するからで, ある文章だけ抜き出すと文脈と異なって独り歩きする」可能性がある」と指摘する。本稿では, 個別具体的な事例や知見を図示するために, 他の教育思想も援用する。

これまでの研究は, 彼の生涯や作品, 社会的背景の事実を明らかにしたものが多く。しか

## 教育者と子どもとの教育関係

し、彼の教育的知見を手がかりに、現代の教育先生」の映像のコメント内容は、分析の際、学生の名前が特定できないよう処理するとともに、課題への示唆を求めるなら、教育者と子どもとの関係性を示すことが必要ではないかと考える。授業改善のための研究として活用することを口頭で伝えている。

なお、本研究に当たって、「コルチャック

表 1 日本教育学会ラウンドテーブルのコルチャック関連企画（JKA 会員研究者の企画）

<p><b>【2003年 ヤヌシュ・コルチャック研究の魅力ー研究の現状と課題ー】</b> コルチャックの教育や子どもに関する思想や業績に関心を持つ人々の間で、現在の研究課題や研究状況、研究資料に関する情報交換を行い、今後のコルチャック研究を進展させていくための足がかりとする。</p>
<p><b>【2004年 ヤヌシュ・コルチャック「子どもをいかに愛するか」を読む】</b> 「家庭の子ども」編（母親向け）、「寄宿学校・夏期コロニー」編（若い教員向け）「孤児院」編に沿って、子ども・教育に関する思想を紹介する。ロシア革命頃から第一次世界大戦に至る時期の、学生時代の街路の子どもや家庭教師の子どもとの触れ合い、小児科医としての家庭の中や病院での子ども観察・研究、夏期休暇村やサマーキャンプでの子どもたちとの格闘と挫折経験、寄宿学校での共同生活の経験を取りあげる。</p>
<p><b>【2005年 ヤヌシュ・コルチャックと教育実践】</b> 子どもを観察するときの態度と方法、子どもに話して聞かせるお話、子どもの生活のある瞬間をとらえて描くときのインスピレーション、自治システムを取りあげ、新教育運動や改革運動の流れのなかでコルチャックの教育実践の占める位置と特徴について考察する。</p>
<p><b>【2007年 コルチャックと新教育ー研究課題の整理と解明ー】</b> 彼の思想や実践は、ヨーロッパ新教育運動の影響を受けていたが、改めてコルチャック研究者の共通のテーマとして課題を整理・探究してみたい。問題を提起し、モンテッソーリ思想とコルチャック思想の関係、「教育の瞬間」を取りあげる。</p>
<p><b>【2009年 コルチャックの「子どもの権利」の内容と意義ー最近の研究動向の紹介と検討ー】</b> 本年は国連子どもの権利条約成立20年、コルチャック生誕130周年にあたる。近年のヨーロッパの国々の研究動向を報告し、彼の「子どもの権利」の内容とその意義について考察する。</p>
<p><b>【2011年 コルチャックの「サマーキャンプ活動」】</b> サマーキャンプ活動におけるコルチャックの教育活動や子ども観について意見交換し、教育活動の歴史的・教育的意義を議論する。また、現代ヨーロッパで展開される夏季休暇中の郊外キャンプ活動、森の幼稚園といった自然や森林が持つ教育的な力にも視野を広げて議論する。</p>
<p><b>【2013年「2012 コルチャック年」とコルチャック教育・研究の動向】</b> 本年はコルチャック没後70年、クロフマルナ孤児院100年を記念してポーランド政府が主催した国際的な「コルチャック年」である。2012年に訪問したイスラエルのコルチャック関連施設と「最後の行進」についての報告をもとにコルチャックの生涯と思想について議論する。</p>
<p><b>【2015年 コルチャック児童文学作品の教育学的検討ー1920年代ポーランド国家・社会とコルチャックー】</b> 1920年代の児童文学作品に焦点をあて、そのいくつかを具体的な検討対象として、彼が子どもに対する大人の態度・関係の在り方の現状や課題をどう考え、子どもたちに何を伝えようとしていたのか、その教育的な考察を試みる。コルチャック研究を進めている若手研究者の報告をもとに幼児教育や保育の現場で実践を続けている実践家との交流を進めたい。</p>
<p><b>【2017年 コルチャックの思想と実践のなかの“道徳”教育ーその意義と限界ー】</b> これまで彼の子ども観や子どもの権利と人権思想の形成に関心を寄せてきたが、道徳教育はこれと関わる点が多々あり、両者の関係を直接議論する課題もあるが、ここでは議論の土台を広く設定して考察し、教育関係者や市民の皆様の参加を得て議論してみたい。</p>
<p><b>【2019年 コルチャック子どもの権利の探究のプロセス】</b> 小児科医の現場での赤ちゃんの権利論に始まり、ロシアの子どもの権利論の影響を受けた発言、孤児院での教育実践とこれをふまえたマグナカルタ三つの子どもの権利（宣言）、独立後に憲法制定に向かって国家的な要請となった制度としての子どもの権利構築とその人類史的根拠の追求、児童文学を通じての子どもの権利に関する当事者（子ども読者）との「対話」の試み、教育実践家・養育施設指導員に対する「子どもの権利」の教育実践プラン、政府による承認がすすむ国際的なジュネーブ宣言（1924年）のポーランド受容とその批判、子どもの実態と権利をめぐる社会批判の書『子どもの尊重される権利』と『子どもをいかに愛するか』改訂版の出版、1930年代初頭から、この種の議論を展開できるような政治経済状況ではなく、彼の思想は未整理なまま歴史のなかに埋もれてしまうことになるが、本報告では彼が考えていた子どもの権利論をまとめてみたい。</p>
<p><b>【2021年 コルチャック研究資料と新たな研究課題】</b> ポーランド語版とドイツ語版の全集、英語版（カナダコルチャック協会編）の紹介、乳幼児教育・保育の分野におけるコルチャック研究</p>

資料) CiNii Reseach より検索した各年の企画の趣旨等を要約して筆者作表

注) 2021年は趣旨などの記載がないため報告内容のみを記した

## 2. コルチャックの生い立ちと社会情勢

コルチャックは、1878年にポーランドのワルシャワで誕生したが<sup>3)</sup>(表2)、ポーランドは、18世紀末に周辺の大国により分割され、国名を奪われた。1918年に独立を果たしたが、20年後にドイツの侵攻を受ける。塚本(2002)は、1900～1918年の帝政ロシアの支配下の民族運動や社会運動、戦争と革命というこの国の特殊な状況を明らかにし、コルチャックの教育思想がどのように生み出されたかを示した。

子どもの権利保障をめざす彼の思想は、ヒューマニズム(「隣人愛」)思想を根底とする。彼は、民族や女性の権利に続き、子どもの権利保障が必要であるとの考えのもと、活動や著述を展開した。

ドイツの侵攻を受け、ナチスのポーランド民族絶滅計画で、子どもが標的とされたため、ポーランドは、民族を守るため、子どもを守ることに必死となり、このような背景が、条約化を求め、自らも条約案を作成したのではないかと考えられる(塚本, 2004)。

ペルツ(1994)は、コルチャックの家族と彼の性格について以下のように述べている。彼の家族は文化や教養にあふれ、慈善の心に満ちたりベラルで市民的な家族であった。彼は積み木遊びや空想にふけるのが好きで、よく小さい子と遊んでいたが、神経過敏ですぐに興奮し、空想壁があり、思い込みの激しい子どもでもあった。

近藤(2005)も、彼の家は、ワルシャワの高級住宅街にあり、ヨーロッパの啓蒙主義の理念を受け入れる少数改革派に属し、ユダヤ的な伝統文化から離れていたと述べている。彼は、上流階級の子どものように育てられ、ドイツ語、フランス語、ロシア語がよくできた。

彼の子どもの頃、ポーランドは、自国の言葉と文化をロシアに抑圧され、公立学校ではロシア語による教育が強制されて、教師への絶対服従が求められた(ペルツ, 1994)。

彼は、ロシアの教育制度をとる私立のポーランド人の学校に通っていた(近藤, 2005)。学校は、厳しく、禁止事項ばかりで、なじめなかったようである。それでも、彼は義務を怠らなく、感謝の気持ちを忘れない子であった。

当時、男子は6歳になれば一人前の労働者として工場で働くのが当たり前であると考えられ、学校に通えず、識字率は低かった。

その上、ワルシャワに住む多くの人々は、劣悪な環境や衛生状態の住居で、疾患を抱えて暮らしていた(ペルツ, 1994)。若者は疑り深く、ずるがしこくなり、大人に殴られた怒りを、小さな子どもや弱者にぶつけていた。コルチャックは、環境が人間をつくると信じていた。

加えて、反ユダヤ主義が見られ始めた。その理由として、民族的・宗教的に異質であることによる偏見、金融業や商業の分野におけるユダヤ人の優越性に対する恐れがあげられる。ロシア政府が反ユダヤ政策を進め、キエフやオデッサで大規模な殺傷を伴う略奪があった。その結果、移民が急増し、多くのユダヤ人は、アメリカやパレスチナなどへ移った。パレスチナではユダヤ人の国家を建設しようというシオニズム運動が高まっていた。

1896年に弁護士であった父が亡くなり、家賃の安いアパートへ移り、家庭教師をしながら、家計を切り盛りした(近藤, 2005)。コルチャックは、子どもの頃から、先生になりたいと思っていた。明るい学校をつくって生徒から慕われる、優しい先生になりたかった。しかし、祖父と同じ医者を選び、医学部に進学した。

その後、亡き父について書いた戯曲「いかなる道でも」でパデレフスキ賞を得るが、この作品を応募した際に用いたペンネームが「コルチャック」である（井上，2010）。彼は露日戦争ではロシア軍医として中国東北地方へ派遣された。彼は、戦争の勝敗よりも、

表2 コルチャックの生涯と主な作品

1878年	ロシア領ポーランド王国の首都ワルシャワで誕生
1896	父の死 作家としてデビュー 『刺（コルチュエ）』に作品投稿
1898	ワルシャワ大学医学部に入学
1899	戯曲「どの道でも」がパデレフスキ賞を受賞 「19世紀隣人愛思想の発展」を発表
1901	「街頭の子ども」（小説）を発表
1902	ワルシャワ慈善協会主催の貧しい子どものための無料読書室のボランティア活動を開始
1904	ユダヤ人子弟のグループのサマーキャンプにボランティアとして参加 「サロンの子ども」（小説）を週刊誌に連載（1906年に単行本）
1905	医師資格取得 ワルシャワの小児科医院勤務 ロシア革命 学校ストライキ 「現代の学校」（論文）を発表 露日戦争で従軍予備医として中国東北地方に派遣
1907	「生活の学校」（小説）を雑誌で連載 ユダヤ人児童のためのサマーキャンプに参加 『モシキとヨシキとスルレたち』（1909）の作品に結実 ベルリンへ1年留学
1908	ポーランド人児童のためのサマーキャンプに参加 『ユジキとヤシキとフランキたち』（1910）の作品に結実 「孤児援助」協会のメンバーとなる
1909	パリへ半年留学 逮捕抑留（理由不明）
1911	ロンドンへ1か月留学
1912	クロフマルナ「ドム・シェロット」運営開始 コルチャックは孤児院の院長 「名声、ある物語」「ボボ」（おはなし） 「不幸な一週間」（学校の生活より） 「蝶々の告白」
1914	第一次世界大戦で大尉として軍隊召集 キエフ近郊の軍の野戦病院の副病院長 「子どもをいかに愛するか」（教育書）の執筆開始
1917	ロシア二月革命 十月革命
1918	ポーランド独立
1919	ポーランド人の子どもたちの孤児院「ナシュ・ドム」の医者・雇われ人として仕事開始 滞滯児教育国立教員養成所に雇用され寄宿学校の教育学を講義 「教育の瞬間」を執筆
1920	ボ露戦争の間、ポーランド軍隊の少佐の地位 伝染病病院に派遣 チフスに感染 看病する母親に感染し死亡
1921	「学校新聞について」を発表
1922	「一人神と向かい合って祈らぬ者たちへの祈り」「マチウシ王一世」を発表
1923	「孤島の王マチウシ」を発表
1924	「若きジャックの破産」を発表
1925	「もう一度子どもになれば」「理論と実践」を発表
1926	ポーランド復活十字勲章を受章、子ども向けの「小評論」を創刊
1929	「子どもの尊重される権利」
1930	「人生の掟」
1934	パレスチナ訪問 「魔法使いカイトウシ」 子どものためのラジオ番組「老博士のおはなし」
1938	「強情な少年、パストゥールの生涯」「人生は善いものだ」
1939	「おもしろ教育学」「老博士のラジオおしゃべり」「ヘシエックの三つの冒険」 コルチャックのホーム、ゲッターへ強制移住
1941	孤児院はゲッター内で再度移動
1942	「ゲッター日記」を執筆開始 最後の演劇「郵便局」（タゴール）上演 コルチャックと教員、スタッフ、子どもたち200名がトレ布林カへ送られる

資料) 日本コルチャック協会 (<http://korczaJapan.org/custom6.html>) をもとに作表

親を失った子どもを見て心を揺さぶられた（近藤，2005；井上，2010）。戦争も革命も子どもたちに過酷な運命を強いる。この経験が、彼を孤児の救済へと向かわせた。露日戦争でロシアが敗北すると、反ユダヤの者は、ユダヤ人が親日的であるとか、革命運動を先導していると主張して、反ユダヤ感情を煽り立てた。一方、彼はベルリン、パリ、ロンドンに留学して、小児医学や子どものための福祉を学び、帰国してワルシャワの小児病院で医師として働く。彼は、社会診断医・臨床医のチェホフの影響を受けて、作家と医師を両立させようと考え、ロンドンでは社会福祉について調べ、フランスでは教育研究所を訪ねた（新保，1996）。しかし、医師では、子どもたちの生活を変えることができないため、子どもたちが衣食住に心配することなく、安心して過ごすことができ、楽しく学べ、一人一人が大切にされる施設の設立を考えるようになった。

1906年より、彼は、ワルシャワ慈善協会が運営する孤児院に教師・世話役として関わり、1907年と1908年にサマーキャンプ<sup>4)</sup>で子どもの集団と格闘し、挫折も経験した（塚本，2004）。1911年には小児科医の職を辞し、1942年まで「孤児たちの家」（ドム・シエロット）<sup>5)</sup>の院長として、経営の維持と子どもたちの養育に没頭した。なお、樋口（2015）は、露日戦争の体験だけでなく、第一次世界大戦で派遣されたキエフで目にした貧困と飢餓に苦しむ戦災孤児の姿の影響もあったと述べている。

「孤児たちの家」では、コルチャックらの保護のもと、子どもたちの自治による生活が成立していた。子どもたちが仲間や教育者を裁く法廷が設けられ、子どもたちによって新聞が発行され、愛と尊厳に満ちた施設であった（シエ

ム＝トヴ，2015）。樋口（2015）は以下のように述べている。「孤児たちの家」には7歳から14歳までの男女合わせて107人の子どもたちが暮らし、戦災孤児や親が子どもを育てられない、子どもを虐待するなどの理由で家庭があっても孤児院に入所するケースもあった。

他の孤児院では、男子は14歳になると職人のもとに出され、女子は16歳になると使用人として働く（大澤，2014）。1日4度の食事と季節に合った衣服が支給され、教育機会も保障されていた。教育者の監視のもと、自立に向けて職業訓練を受けながら、従順で規律正しい生活を強いられていた。コルチャックは、子どもの生や正常な発達を保障するため、施設や設備を整える必要があると考え、それを実現するために、ワルシャワ慈善協会に関わるようになった。

他の孤児院と比較して、「孤児たちの家」は、子どもを理解しようとしたこと、子どもが主体的に共同して生きることを目指したこと、個の生活を保障しようとしたことに特徴がある（大澤，2014）。

個の生活を守ることにについて、井上（2010）は、「子どもにも秘密を持つ権利がある」「子どもの持ちものやお金を大切にしなければならぬ。おとなにとってつまらぬものであっても、持ち主にとっては大切な宝である」「子どもは幸福になる権利を持っている。子どもの幸福なしに、おとなの幸福はあり得ない」とコルチャックが述べていると指摘する。

大澤（2014）は「孤児たちの家」を、必要な設備が整えられ、衛生的にも養育的にも優れた建物であったと評価している。とくに子どもが一人になれる「静寂の部屋」をつくったことに着目している。コルチャックは、調理や配膳、

洗濯、掃除、下着の配布、マットレス干しのような係仕事を取り入れ、子どもの責任者を置いて、係仕事の管理・統制をさせたり、年少者の教育や手助けを行わせたりしていた。職員が少なかったため、子どもの力を得ることが必要であった。どの係仕事を担当するかは、子どもたちが話し合っただけで決まっていた。子どもたちは、仲間や職員と一緒に、自らの生活の場の運営に主体的に関わっていた。

大澤（2015）は、子どもの権利を尊重し実現するためのものとして、「仲間裁判」「学校新聞」「掲示板」「子ども議会」をあげている。「仲間裁判」では、訴えられた子どもは、仲間5名の子ども判事の審問を受けた（ジョウゼフ、2005）。判事は、直近の1週間の間、誰も訴えず、訴えられなかった子どもの中からくじ引きで選ばれた。教育者は、発言し判決を下すことはできないが、毎日調査し、両者の証言や目撃者の情報を書き出す。コルチャックがつくった仲間裁判法典に基づいて判決が下された。大人も同等で、判決に従わなくてはならず、コルチャックは半年間に6回も訴えられたことがある。

「子ども議会」は、どうすれば自分たちの家をもっとよくしていくことができるか、先生に何を要求するかなどを子どもたちで話し合い、結果を提出した（井上、2010）。大澤（2022）によると、議員は20名で、2週間に1度招集されていた。

大澤（2011）は、上記のような取組は、サマーキャンプでの経験や挫折が生かされていると述べている。「好感度評価」も取りあげているが、コルチャックは、それを通して、大人に見えていない、子どもたちが見る子どもたちの姿を学んだ。

コルチャックは、孤児院に進んだ教育理論

や教育方法を取り入れ、臨床的観察と細かく記録された観察データに基づいて洞察し、判断していた（ジョウゼフ、2005）。

また、若い女性教育者ステファニア・ヴィルチンスカ夫人の存在も大きかった。彼女は、富裕なユダヤ人一家の出身で、スイスとベルギーで学び、フレーベル式の幼児教育を専攻していた。どんな些細なことでも、子どもたちの相談に乗っていた（ペルツ、1994）。

コルチャックは、第一次世界大戦下のキエフで小児科医をしているときに、マリナ・ロゴフスカ・ファルスカと出会った（ペルツ、1994）。彼女は、ポーランドの戦災孤児のための孤児院に関わっていたが、後にワルシャワでポーランド人のための孤児院「僕たちの家」（ナシュ・ドム）を設立する。「孤児たちの家」と「僕たちの家」の教育スタッフは連絡を取り合い、子どもも交流し、休暇を一緒に過ごした。2つのホームとも自治を基本とし、教育スタッフは、子どもにふさわしい条件を作り、励ましさえすれば、自分から改善するようになると確信していた。

1934年にナチス・ドイツとポーランドは不可侵条約を結び、結果として、ポーランドはナチス・ドイツの協力国となり、反ユダヤ主義が広まり、ユダヤ人は急速に貧困化した。1939年にドイツは不可侵条約を破棄し、ソ連軍も侵攻を開始した。政府首脳陣はルーマニアへ逃亡し、ドイツにより、ユダヤ人の行動の自由と財産権が制限された。10歳以上のユダヤ人は、右腕に「ダビデの星」が記された腕章をつけること、14～60歳のユダヤ人は強制労働が義務づけられた。コルチャックは、ポーランド軍服を着続け、腕章をつけることを拒否した。ユダヤ人は食料配給所で食料を配給してもらえず、

コルチャックは、子どもたちのため、いつも食料や石炭、薪などを探し求めていた。

1940年10月、ヒトラーの指令で、コルチャックは、彼の孤児院の子どもたちとともにワルシャワのゲットーに強制移住させられた。

樋口（2015）は、ゲットーの生活を「厳しい寒さと飢餓、伝染病の蔓延、テロ、ユダヤ人同士の密告の横行、絶望的な生活環境は地獄であった。孤児院では学習会、音楽会、演劇上演などの文化活動が行われた」と述べている。ペルツ（1994）も、以下のように述べている。ゲットーで生きていくために「子どもたちは、鉄条網を潜り抜け、壁を乗り越えて、ゲットーの外で物乞いをし、密輸に一役買っていた」。「ホームには平和と秩序があった。裁判や自治会、新聞、日課や授業時間割も変わりなかった。掃除や片付け、縫物、料理、体重と身長測定、年長の子どもは建築現場での労働、駅で石炭の積み下ろしや線路の切り替え、物々交換で食べ物を手に入れてきた」。

ついに、1942年8月にコルチャックの孤児院も「ユダヤ問題最終解決」の対象となり、彼は、200人の子どもたちとともに、ゲットーからワルシャワ・ダンツィヒ駅までの2.5kmの道のりを緑の旗の少年を先頭に4列で行進した。家畜用貨車に詰め込まれ、100km先のトレブリンカ絶滅収容所へ送られた。この間のコルチャックと子どもたちの行進は、目撃した人により、「最後の行進」と名づけられた。途中、何度も周囲から救出の手を差し伸べられたが、彼は拒否し続けた（塚本，2019）。

### 3. コルチャックの子ども理解と教育

コルチャックは、孤児院に入所する子どもたちを、社会に抑圧された貧しく不幸な存在ととらえ、教育者が協力して、子どもたちの成長を阻害している要因を除去し、治療することを求めた（大澤，2022）。

しかし、施設での最初の1年目は「人生で最悪の年」となった（新保，1996）。けんかや落書き、物の破損や盗難などに怒鳴り、疲れ果て、涙で目がかすみ、挫折感を味わった。やがて、大人が自制心を持ち、子どもたちを見守り、年上の子どもが年下の子どもを思いやるとともに、度を越したいたづらを戒める秩序ができはじめた。

それとともに、労働や自治を通して、互いに譲歩し、監督し合うことや、協働することの必要性を理解することができるようになった。規則正しく従順に生活するのではなく、自ら生活の場の運営に関わり、仲間や教育者と共同して生活することが大切であると、コルチャックは考えていた。

住民投票を行い、自分に対する他者からの評価を得、他者に対する自分の気持ちを表現させた。このことにより、子どもたちは、自分の行動を抑制、鼓舞し、賭けを行って自己改善の機会が与えられた。

係仕事では、責任者の役割を明確にし、子どもたち同士で監督し合い、教え合う仕組みをつくった。年少者の養育担当者を設け、後見委員会を設置した。

仲間裁判は、赦すことを前提とし、規則や秩序を守らせる機関でもあった。コルチャックは正義を教え、子どもたちが正しい人生を歩むこと、悪と闘える人間になることを求めている。

掲示板や新聞は、情報を伝達・交換・共有



する場であったが、子ども自身の意見を表明する役割もあった。

全国の子どもたちを読者とし、子どもたちによる新聞も発行された（ジョウゼフ、2005）。全国各地に郵便箱を設置し、電話対応も行った。

彼は子どもたちから学び、子どもたちの大人への信頼を回復することに取り組んだ。彼自身も、子どもたちに対して、もともととは善良で、環境や大人の導きがあれば、自分を向上させようとする傾向が備わっていると信じた。子どもものの考え方を尊重し、理解しようとした。

「孤児たちの家」では、青年のための施設ブルサ（1923年）がつくられ、16～26歳の青年が1931年までおよそ20人いた。そのほとんどは、中等教育か高等教育を受け、毎日4時間の家事労働か3時間の子どもの教育に携わることが義務づけられていた（新保、1996）。

自治が浸透すると、彼と子どもの関係が変わり、子どもはコルチャックに個別的な対応を求めなくなり、自分自身で、あるいは職員や青年らの助力を得て、様々な問題を解決し決定するようになった（ジョウゼフ、2005）。

1923年にコルチャックは『孤島の王マチウシ』を発表するが、柴田（2017）は、この著書を、大人が子どもとの関係の問い直しをするために読む意味があると述べている。子どもとの関係の複雑さを理解した上で、子どもをどのように理解すべきか。平和的に解決しようとして、子どもと向き合わず、大人がよいと思う解決策で事を済ませようとしていないか、子どものためと言いながら子ども不在の議論を繰り返しているかと言いつつ指摘する。

大人は子どもを守り、保護することが最善の利益につながると安易に思いがちであるが、物語のマチウシは、それは違うと反論している。

大人が、子どもの悲しみや喜びを理解できない限り、子どもを理解することはできない。

子どもの悲しみを尊重することについて、近藤（2005）は、コルチャックが5歳の時に、飼っていたカナリアが死んだ体験を紹介している。お墓の上に十字架を立て、お祈りの手を合わせると、管理人の息子に「カナリアは天国にいけない」「ユダヤ人もカナリアである」と言われ、死の悲しみを認められないだけでなく、初めてユダヤ人問題と出合った。

作品では、子どものずるさやいたずら、意地悪さも表現され、時に子どもは邪魔な存在となることも描かれている。子どもの理解は容易ではないことを示しながら、それでも、子どもを理解し、子どもに尊敬されるとき、応答的な関係へと変わる可能性があると言われている。

塚本（2011）は、1899年の論文「19世紀隣人愛思想の発展」執筆の歴史的意義と彼自身の執筆動機に焦点を当てている。子どもの存在に注目する歴史的風潮に触れながら、コルチャックは、ペスタロッチ、フレーベル、スペンサーらの思想から、子どものなかの「人間」と「自然」を探究する姿勢と方法を学び、それらを、その後の子ども研究の中心とした。

「人間」について、この論文にある「子どもはすでに人間である」という彼の信念は揺らぐことはなかった。当時、子どもは大人によって人間になっていくものであり、尊重に値する人間となるというのが、普通の大人の認識であったが、コルチャックは、これを批判した。

「自然」について、医者としての彼は、乳児の顔に、成熟した人間の精神的風貌と同じものを観察できる一方、大人とは異質の人間であることも認識した。乳児は、大人とは精神構造が異なり、経験も不足している。彼は、大人と

子どもは、知性は同等で、感性は大人より優れていると評した。

また、彼は、1905年に発表した「現代の学校」で、帝国主義的な海外発展をするために行われる欧米の教育を批判した（近藤、2005）。加えて、子どもの問題が革命によって解決できるかを考え、懐疑的となり、ロシア第一次革命以降、政治活動から遠ざかった。

小田倉（2016）は、コルチャックの『もう一度子どもになれば』より、子どもと大人の主観の往来は、大人に、子どもの内面的世界に対する共感を持つ機会を与え、子どもの目から大人のあり方への洞察を促すと述べる。子どもの目線で、子どもが体感していることを知ることが、教育者にとって重要な意味をもつ。教育者は、子どもが教師の行為をどう感じているかを、子どもの立場で感じなければならない。また、教育者は、子どもの立場で教育者としての感覚を失わないことも必要で、教師と子どもの両方の側から、教師としての自分の行為を感じることが求められる。そして、子ども理解にとどまらず、自分の行為の改善を図り、教育者として自己陶冶を行う。

#### 4. 子どもの権利と教育

ユニセフは、コルチャックを「子どもの権利条約の精神的な父」と称し、彼自身は、自らを、4度の戦争と3度の革命を見ただけでなく参加もしたと回顧している。政治と宗教、イデオロギーの対立の中で、多くの子どもたちが犠牲になっている。子どもたちに平和を保障することが、子どもの権利を尊重する前提にある。

コルチャックは、子どもの権利を人間の権利として追求し、子どもが子どもであるがゆえに剥奪されている人間の権利の保障が、子ども

の権利追求の理由であるにとらえている（塚本、2002）。子どもの社会的存在から、意見を表明し、社会に参加する権利を求めている。そして、大人と子どもの権利は互いに相反し、利害調整の上で、両者が相互の権利を尊重し、共存できる世界を求める。とりわけ大人が子どもを尊重し信頼することを望み、子どもの権利の確立を求める。そのためには、子どもの「望み、願い、要求」に耳を傾け、彼らの「成長する権利と成熟する権利」「果実を受ける権利」を保障することが必要であると主張している。

1924年の国際連盟によるジュネーブ宣言に対しては、子どもの社会的処遇・保障の改善と、子どもとしての権利を保障することが必要であると主張した（塚本、2021）。ジュネーブ宣言に対して、「権利と義務を取り違え、要求ではなく友好的な勧告に聞こえ、それは好意を求めているという善意への訴えである」と評している（塚本、2004）。児童の権利宣言が各国政府で立法化されず、権利保障が強く認識されていないことへの批判を表している。

また、塚本（2004）は「子どもの死に対する権利」「今日という日に対する子どもの権利」「子どものあるがままで存在する権利」をあげ、大人との関係をふまえて述べている。当時は、いつ死に至るかもしれないという恐怖から、子どもたちに対し、危機管理のため、命令と禁止を多用していた。未来のために現在で負担を強いて、現在の生活・感性・思考を軽視・無視し、「今日という日に対する子どもの権利」を与えなかった。この権利は、子ども固有の権利ではなく、人間として本来持っている権利である。子どもがどうあるべきかよりも、目前の子どもの望みや願いを聞き、自分が何を伝え、教えることができるか、子どもをどう成長させるかが、

教師と子どもとの関係では重要である。

乙訓（2009）は、コルチャックの『尊重すべき子どもの権利』を取りあげて、子どもの権利論を展開している。乙訓の記述内容をもとに、教育者の子どものとらえ方は、以下のように要約できる。

「ポジティブな存在」

- ・子どもは希望や喜びと安らぎを与えてくれ、生活の光となる。

「ネガティブな存在」

- ・物事を知らない未熟な存在。そのためか、子どもの疑問や意見は信頼できない。
- ・子どもはあてにならない気まぐれな存在。ずる賢くて油断できず、嘘をつき、隠しごとや言い逃れをする。
- ・落ち着きのない騒がしさや好奇心と質問にうんざりし、疲れる。
- ・彼らを見下し、不信や疑いを持ち、容赦のない追求や非難と告発となって罰する。

コルチャックは、子どもの「尊重すべき権利」として、①子どもの無知、②子どもの失敗と涙、③子どもの所有物ともくろみ、③子どもの成長の秘密や成長、④子どもの現在の時間、⑤子どもは大人と同じ存在であることをあげている。このうち、④は基本的な子どもの権利としても取りあげられている。

「19世紀隣人愛思想の発展」で、「子どもはだんだんと人間になるのではなく、すでに人間である」というテーゼを提起し、子どもを通して人間を見ようとした（塚本、2004）。彼は、子どもとの関係においては、ともに考え、決めるという基本姿勢をもつ。教育者は、子どもに対する姿勢や言動、生活そのものを省みることを起点として、自分に何ができるかを考え、子

どもの現在に責任を持つ。どんな子どもも間違いをし、嘘をついたり、人のものを盗ってしまったりすることがあるかもしれない。彼は、その理由を子どもから聞き出し、間違いを繰り返させない、立ち直りを期待して子どもを待つ姿勢を取った。仲間同士で、立ち直りを互いに求め、自発的に申し出た子が心のケアを行った。新入生に対しては、初めの3か月は、2～3歳年上の「保護者」といわれる子どもが施設の決まりや分からないことを教え、その子が責任を持つしくみが設けられていた（新保、1996）。

孤児院には法廷が置かれていたが、法廷は訴えを申し出た者や周囲の者たちが赦し、訴えられた者は謝罪をして、二度と過ちを繰り返さないことに重点が置かれ、間違いを犯した者を裁いて罰することがねらいではなかった（樋口、2015）。裁判では、自分たちの問題に対し真摯な態度をとり、公正に判断しなければならない。コルチャックが望んでいたのは、子どもの権利を尊重することで、大人と子どもが相互の権利を互いに尊重し合うことであった。

また、子どもたち一人一人の生活を保障するため、プライバシーと財産を保障する仕組みが設けられていた（大澤、2022）。郵便箱が置かれ、コルチャックらに、質問や要求、不平や告白などを個人的に伝えることを可能にした。落とし物入れや貸付・貯金窓口なども設けられ、子どもの所有物や財産を管理した。集中して勉強や読書ができるよう、私語が禁止されている部屋を設置した。

コルチャックは、子どもたちの生きる権利を認めるとともに、死期が迫ってきたときには、死の権利も教えた。子どもが今を精一杯生きることが出来る権利を保障するのが大人の責任である（新保、1996）。タゴールの戯曲の上演を通

して、お迎えに来た天使を子どもたちも優しく安らかな気持ちで迎えることを学ばせようとした。

乙訓(2009)は、コルチャックの「子どもの権利論」は「ジュネーブ宣言」の影響を受けて1928年に公表されたが、第二次世界大戦後に評価され、1959年の「子どもの権利宣言」と1989年の「子どもの権利条約」の採択の先導的役割を果たしたと評している。

世界的な動向としては、1978年にユネスコがコルチャック生誕100年と国際児童年(1979年)を記念して、1978年から1979年をコルチャック年とした。ワルシャワでは、1979年に国際J・コルチャック連合が設立され、会長にポーランド人が就任したこともあり、子どもの権利宣言の条約化を、国をあげて取り組み、採択提案に至った(西川・弘田, 2015)。

## 5. 映像視聴の所見から見た学生の意識

西川・弘田(2015)は、保育士や介護福祉士を主とする対人援助職を目指す学生を対象として、コルチャックを題材とした絵本や「子どもの権利条約」を用いた授業実践と学生の反響について述べている。この授業では、新聞や小説、映像媒体などに関心を持ち、人の生き方について自ら考える力を養い、対人援助職に求められる資質を身につけることを目的としている。

筆者は、中学校・高等学校の保健体育の教員免許の取得を目指すスポーツ健康学部の学生を対象に「教育原理」の授業を担当しているが、全15講のうち、第13講で「教師の仕事」、第14講で「コルチャック先生」<sup>6)</sup>の映像視聴と解説、子どもの権利条約(時間が取れない年は第15講)、第15講で「現代の教育課題」をテーマとして、講義を行っている。

「コルチャック先生」は、1990年の作品で、

ポーランドと西ドイツとフランスの合作により映画化されたもので、日本では1991年9月に岩波ホールで上映され、後にDVDとして販売された。コルチャック先生を演じたヴォイテク・プシヨニャック<sup>7)</sup>は、ウクライナで生まれ、ポーランド、フランスへと移住した。

第14講では、映像の字幕をもとにコルチャックの台詞を記したプリント(表3)を配布し、シーンごとに区切り、ストーリーを含めて短く解説して、コメントを書く際の参考にさせた。

塚本(2004)は、コルチャックを「ナチズムに対する毅然たる態度で、子どもたちと生死を共にした大人の模範的姿を示すシンボルとして歴史から呼び戻される」と位置づけているが、映像は1936～42年の6年間、コルチャック58～64歳の、ナチスとの苦闘の日々を表現したもので、彼がこれまでにやってきたこと、求めていたことが、限定された環境で実現できなかったことを、先に解説しておく必要がある。

映像視聴後の学生のコメントから、どのシーンに着目しているかを見ると(図1)、2017年は、シーン【1】【8】【2】【10】、2019年は、シーン【5】【2】【8】【10】、2021年は、シーン【10】【8】【2】【9】が多い。年によりばらつきはあるが、【2】【8】【10】が上位にある。【2】は身近にあるユダヤ人差別、【8】は子どもたちの自治、【10】は子どもたちの死の権利についてクローズアップしている。回答数は2017年が70名、2019年が40名、2021年が50名である。

次にコメントの内容からどの点にふれているかを見ると、多くの学生は、差別と権利、どのような状況下でも強い信念と意思をもって子どものことを優先して考え、言葉かけや行動ができるコルチャックの姿について述べている(図2)。

教育者と子どもとの教育関係

表3 「コルチャック先生」の映像シーンとコルチャック先生の台詞

主人公と当時の社会状況	
「ヤヌシュ・コルチャック」の筆名を用いて活動したユダヤ系ポーランド人教育者・児童文学者・小児科医ヘンリク・ゴールドシュミット (1879～1942) の半生を描く。1936年、コルチャックは前年から子ども向けラジオ番組「老博士のお話」のホスト役をつとめ、人気を集めていたが、ある日局の重役が番組の打ち切りを告げられた。やがて第二次世界大戦が勃発し、ワルシャワはドイツ軍に占領される。およそ200人が及ぶ身寄りのない子どもたちを養うコルチャックの孤児院も、ワルシャワのゲットー内に移設されることとなった。	
シーン タイトルは筆者作成	コルチャック先生の台詞 (太文字は配布プリントに記載)
【1】 ラジオ番組 打ち切り	世のため、人のため、身を捧げるというのは嘘です。ある者はカードを、ある者は女を、ある者は競馬を好む。私は子どもが好きです。これは献身とは違う。子どものためにはなく、自分のためなのです。自分に必要だからです。自己犠牲の言明を信じてはならない。それは虚偽であり、人を欺くものです。
【2】 ユダヤ人差別	(少女が足を怪我) どうした。どうしたのかな。ここにおいて。チチンブイブイをしよう。そら痛くないよ。もう痛くないよ。本当だろう。(先生と話し合い) ユダヤの孤児院にとってよい方法ではない。(なぜユダヤ人の汚物を洗濯するべきなのかという言い争い) もっともです。そんな義務などない。彼らの親が洗うべきです。私はここにいる子どもたちの親がわりです。だから私が洗います。いいえ私は医者です。平気ですよ。(ステファさんが来訪) なぜ戻った。戦争は避けられん。私は3度の戦争を体験している。酔っ払いが子どもを叩くのが一番悪い。世界が必要なのは新たな信頼関係だ。
【3】 子どもの心理	みんな泣かないで。怖くないから。どうだ。きれいだろう。何。待って。怖がらないで。もうすぐ、もうすぐ終わるよ。(大学にて) 講義はレントゲン室で行います。みなさんが気分が悪い時や疲れている時は、子どもは耐えがたくイライラした存在となり、みなさんは怒鳴ったり、腹を立てたりして、興奮のため、無理解になり、子どもを叩くことになる。よく観察して覚えて下さい。子どもの心臓はこうして、常に反応しているということ。
【4】 子どもたちの 分散居住	死んだら彼らの思うつぼです。あなたは戦争を生き抜きます。分かりますよ。いいえ。戦争は無数の苦痛と悲劇を生みまします。でも過去を消し去ると信じます。2度と繰り返されることはないだろうと。ポーランド人がその兄弟たるユダヤ人を迫害することはないだろうと。この時まで生きることができて私はうれしい。(診察室へ) どうも悪くない。完全に健康だ。(釈放) やめろ。恥ずかしくないのか。ポーラはどことだ。よくそんなことが。我々が選別をする？ 子どもは賢いからピンとくる。子どもたちは我々と一緒にいるのが一番だ。冗談だろ。そんな気は毛頭ない。私だけが行くなんて。問題外だ。
【5】 爆撃の恐怖	(自分の部屋へ抱きかかえベッドへ) 寝なさい。何でもないよ。おやすみ。私のベッドだ。自分のベッドに戻るかい。いいや。邪魔じゃない。さあ、いい子だから寝よう。左の親指が右の親指に「おやすみなさい」と言う。左の手が右の手に「ぐっすりおやすみね」と言う。次に左の手を右の手に合わせて、右の手を左の手に合わせて。そう、そのように。左手を頭において言いなさい。「楽しい夢を。おやすみ。」眠れますように。眠れ、眠れ。
【6】 生活支援依頼	こんなのは、小屋もなければ離れもない。ユダヤの乙女は騎兵のキスは嫌い。金持ちや慈善家の助けがなければ、誰を頼ればよいのでしょうか。これはあなたの義務です。ユダヤの子どもや国よりも自分への義務です。3袋と300ズロチを。
【7】 少年シロマ	(彼を抱きしめて孤児院へ) いつも外に出ている私はどうなんだ。座れ。傷を数えたことは。相当な数だ。軍人の勲章みたいだな。戦闘と大きな手柄の記念だ。犬に噛まれたか。分かるよ。これはバラ線の傷かい。およそ20だ。上半身でそんなもんだ。悪くはない。着なさい。これは。ラビになりたいか。本は嫌いだろう。世界を見たいか。分かるさ。私も昔は大旅行を夢見た。世界を変えたかった。例えばお金を廃止する。貧乏がなくなり正義が残る。もう理解しているのか。当時の私には分からなかった。でも試さんことには。少しはね。もっと有名になるかもしれん。先生は年寄りだ。それはそうだ。だが年寄りでも時には成功することもある。そうとも。よく覚えておこう。おいで。ユゼフ。新しい仲間のシロマだ。家を見せてあげなさい。
【8】 仲間裁判と コルチャックの 覚悟	こんには。教師以上の暴君はいない。子どもたちは自分で身を守ります。私の部屋に来てください。法廷侮辱罪になりますので。(先生の部屋で) プルジョフの無法者め。我々に連帯などない。ユダヤ警察をつつくせに。すでに200人いたから引き取れない。100人でも狭いのに200人もいる。子どもを危険にさらしたくない。教人なら可能だ。一番困っている子どもをだ。(ジェルナ孤児院では子供たちが死んでいく。職人は盗賊、咎めもしない) あまりにも単純に、この異常な状況を受け入れている。私は子どもたちに最大限の安全保証の義務がある。残念だが全部の世話はできない。戦争が終わったら、ドイツ人孤児の世話をす。
【9】 尊厳ある死	ご存じのように、お分りのように、毎日子どもの死骸を路上に見ます。家族のない子どもや、飢えと寒さで死んだ子どもたちです。貧しい両親に見捨てられ、埋葬もされない。壁を越える時にドイツ兵に撃たれた子もいる。病院は満員で、瀕死の子どもを拒否する。そのうちに死体置場を作らねばならない。安くて場所をとらん所を。生地屋のような棚のついている部屋十分だ。今なら店が空いている。そんな店がたくさんあるはずだ。死にかけている子どもを棚に寝かせる。付き添いの人と部屋を暖める石炭が欲しい。彼らを助けられないのなら、せめて安らかな死を与えてやりたい。安らかで尊厳のある死を。分かるか。
【10】 ユゼフと シロマの 悲しみ	私の部屋に來い。今すぐ。ユゼフ。どうした。何度もある。母が死んだ時、私は死にたかった。妹と一緒に。妹に苦勞させまいと思ったが、妹が嫌がった。エバを愛しているのか。なぜそう思う。ナトゥカがお前を愛してる。それが恋だ。死ぬことは簡単だ。生きることは難しい。もちろんある(子どもにも死ぬ権利は) しばしば大人よりも尊厳をもって美しく死ぬ。私は病院でそれを知った。寝なさい。お前は立派で勇気のある人間だ。女性のために死ぬ。もちろんだ。お前は一人前の男だよ。シロマの母が死んだ。外で彼と働きなさい。彼は強い子だ。おやすみ。私が5歳の時だった。私のカナリアが死んだ。墓に十字架を立てたかったがダメだと言われた。鳥は人間より劣るということだ。それを嘆くのなら罪なのだ。もっと悪いことに管理人の息子が言うには、そのカナリアはユダヤだ。そして私もユダヤだ。ポーランド人でカトリックの彼は天国へ行くだろう。私はどこへ行くのだろうか。地獄ではないが、どこか暗闇へ行くだろう。私は闇が怖かった。
【11】 愛し合う若者	お入り。どんな助言も君たちには向かない。言葉は貧しく力がない。君たちに神を与えることはできない。自らの心の中に見出さねばならない。祖国も同じだ。君たちが捜し出すべきものなのだ。君たちの心と思想の中にね。また愛も私は与えることができない。なぜなら慈悲なくしては愛はないからだ。この苦惱は君たちのものだ。私には何も無い。現在は存在しない良き日。しかしいつか訪れる良き日への望みが君たちを神へ導く。そして愛と祖国へ導くだろう。
【12】 コルチャック の闘い	ついてくれ。いや結構。私は行かねばならん。誰が。彼か。軽い怪我だ。孤児院に金が必要なのだ。彼らは誰よりも金持だからかな。なるほど。だが私の立場もある。子どもたちを救うためなら私は悪魔とも会う。誇りはない。200人の子どもがいるだけだ。誇りなどない。(自宅へ) ひと休みしていただけだ。立ち上がりにたくない。一度立ち上がると片足をもう一方の足の前に出し、また歩き始める。疲れるな。ユダヤ人はよくない。年寄りのユダヤ人はもっと悪い。病気で年寄りのユダヤ人はその上だ。何より悪いのが病気で年寄りのユダヤ人だ。しかも200人も孤児を抱えている。どうでも構わらん。今日はよい日だった。本当によい日だった。(子供分散について) いかん。子どもは恐怖にさらされる。苦痛にも。反対だ。たぶんその通りだ。(孤児院の存続) 寝なさい。元気を出してぐっすりお休み。

資料) 「コルチャック先生」の字幕 (山崎剛太郎) をもとに筆者作成

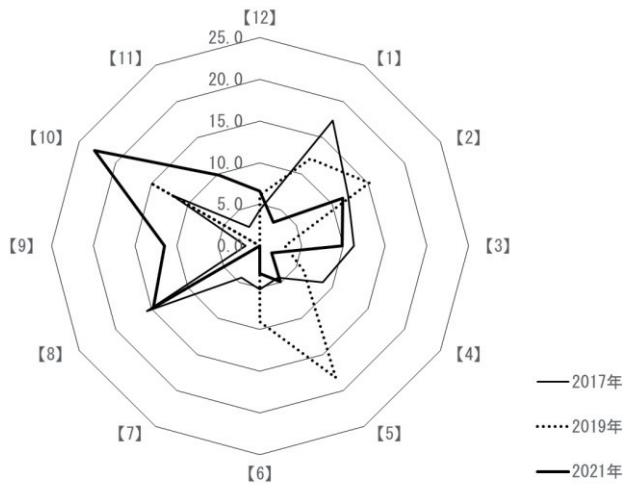


図1 学生の映像視聴コメントからみた関心のあるシーンの年別差異（単位：％）

資料) 学生の記述をもとに筆者作図。シーン番号は表3と対応する

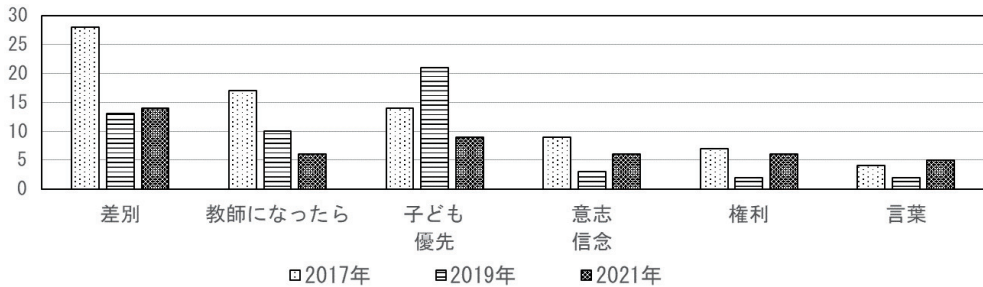


図2 学生の映像視聴コメントからみた内容別・年別差異（単位：％）

資料) 学生の記述をもとに筆者作図

「教師になったらこうありたい」について、述べている学生も多い。本稿では、多く見られた3つの意見（一部）を取りあげてみたい。まず、学生Aのコメントであるが、コルチャックを「教育者の鑑」とみている。

「ひとりひとりの気持ちをくみとり、理解して、自ら危険を感じながらも、子どもたちを守る姿に心を打たれました。懸命に子どもたちを守り、最後に遠足に行くと言ったこと（＝最後の行進）も先生らの愛だと思えます。教員のかがみだと

思いました。」

次に、学生Bのコメントであるが、子どもたちに寄り添い、抱えている不安や悩みを親身に聴くことの重要性をあげている。

「子どもたちの前では、辛さや不安を見せず、優しく手を差し伸べ、抱きしめることで、子どもたちの不安は和らいだと思った。子どもたちのことを一番に考え、大切にしているからこそ、子どもたちから愛されているのだと思った。戦争がない現代でも、子どもたちはひとりひとり

不安を抱えていると思うので、不安を和らげてあげられるような教師を目指したい。」

最後は、学生Cのコメントであるが、学生Aのコメントを一步進めて、自分の在り方を述べている。

「コルチャック先生は、当時、日常的にユダヤ人への差別意識がある中で、ユダヤ人の子どもにも平等に教育をしていた。周りに流されない自分の正義を持っていてすごいと思った。子どもたちに裁判をさせ、自分の身を自分で守れるようにする教育に感心した。子どもたちを守るために、最後まで戦ったコルチャック先生は、教師のかがみだと思った。教育に対し、絶対的な答えはないと思うので、常に考え悩みながら教育していこうと思う。」

## 6. 教育関係から見た考察

リデル(2021)は、「子どもを養育する上で、コルチャックが重視したのは、自由な雰囲気の中で子ども自身が自治によって自らを律すること、個性を伸ばすこと、子どもの好奇心を大切に、失敗と涙を温かく見守り、尊重することであった」と述べ、それは、彼自身の子ども時代の体験が影響していると指摘している。彼は、他の子どもたちと一緒に外を駆け回りたかったし、大人の前でも自分の思いや考えを堂々と主張し行動したかった。

ナラティブなアプローチによって、子どもを理解する手がかりを得ることは、子ども理解のあり方を問い直し、改善するために有効である(柴田, 2017)。

松浦(2021)は、ドイツの教育学者であるバ

イナーの「尊敬の教育学」に基づいて、コルチャックの「子どもの権利」の思想の教育学的意義を明らかにした。「尊敬の教育学」では、教育は、大人と子どもが尊敬し合うことにより成り立ち、大人は子どもの要求や願いにどう寄り添うことができるのかに教育学の原点を見いだそうとしている。子どもを一人の固有な人間としてとらえ、学び方、育ち方、教育のあり方を保障することを重視している。

田中(2016)は、「教える・学ぶ」の関係を教育関係と示し、この語は1925年に教育学者のノールが用いた語の訳語であると述べている。田中は、この教育関係を、ハイデッガーの存在論を援用してとらえ直した。自分を「死に向かう存在」として受け入れることは、自分が固有本来的に生きようとするうえで重要な契機になると述べ、固有本来的に生きるためには、他者とともに存在していることを了解していることが必要で、愛や赦しや悼みといった情感で共存は特色づけられると述べた。

田中は、固有本来性に向かうことを、人それぞれに呼びかける「内なる声」より説明している。「内なる声」は、自己や社会を超え、外から到来するもので、自己を衝きあげ、「パトス=パッション」となると述べる。教育者は、対面する他者を護り助け、なすべきことをなすように求められる存在である。教育者もすでに他者に護られ助けられてきた。

教育関係では、子どもの教育者への尊敬を基礎とするが、尊敬は、より優れた能力への尊敬と、両者の「よりよく生きる」という信念への尊敬に分けることができる。前者では能力の優劣を争う競争を生み出し、感情的確執をもたらす。後者の信念への尊敬では、大人と子どもの両者が「内なる声」を聴き、「よりよく生き

よう」という信念を交感しあうことにより、一人一人の固有本来性が現れる。

また、教育関係を、教育的態度と主体的な学びからとらえている。教育関係は教育者と子どもとの感情や意識などのずれに対し、教育者が適切に応答し、行動しようとする態度を含んでいる。子どもを理解することは、そのようなずれを小さくし、応答や行動の支援にはなるが、態度には結びつかない。教育者に子どもへの愛情や教育への熱意が問われている。加えて、子どもがよりよく生きようという信念を持っていると教育者が信じ、子どもに到来する「内なる声」を感じ取ることができると、教育関係は維持強化される。

次に、主体的な学びについて、この学びは、「内なる声」への聴従を看過、無視していると述べている。教育者の求める主体性は、「内なる声」と一致するとは限らないからである。外からの「内なる声」への聴従は、子どもたちに開かれた自己を求めている。対面する教育者は、

自分に訪れた「内なる声」にも呼応する必要がある。

教育関係の基礎として、「内なる声」が導く「よりよく生きよう」という信念がある。教育者と子どもは交感し、具体的に呼応し合う共存在である。「内なる声」は、意味や価値をふまえつつ、それらを超越する。現代の我が国の学校教育で、この超越性がどう扱われているか。すべての教育内容は、目的合理性と有用性の観点から管理・条件づけられ、超越性が考慮される余地はほとんどないかのように思われる。教育者が、自分と子どもの「内なる声」を聴く教育的態度を持てるかが問われている。

以上の内容をふまえ、コルチャックの教育思想を中心として、教育者と子ども、社会との関係を示した(図4)。政治・経済・民族・宗各国間で対立が深刻化すると紛争や戦争に至ることもあるが、そのような不安定な状況では、教育者(教師や親など)と子どもは、経済的・精神的に影響を受ける。

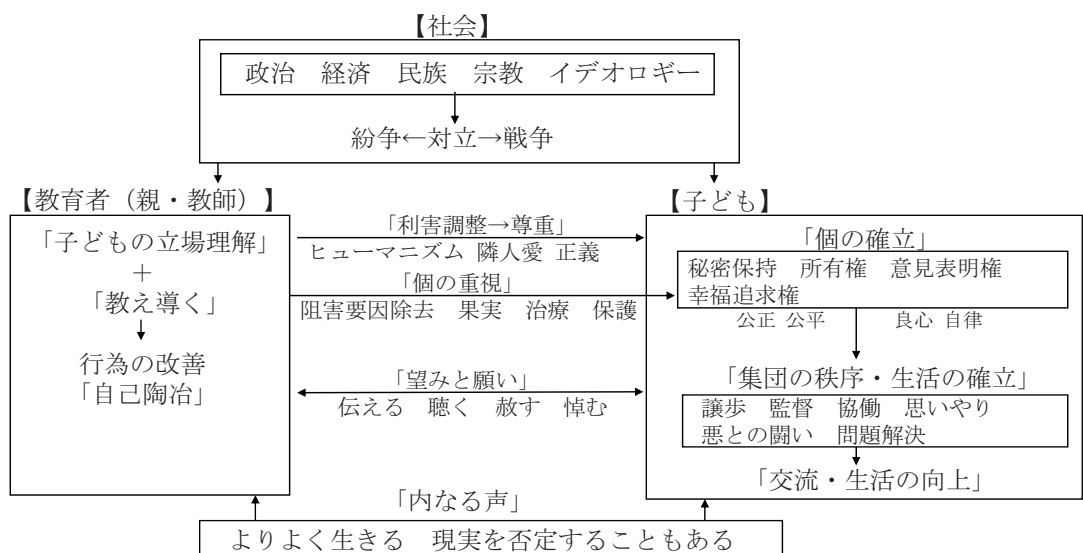


図3 教育者と子どもとの教育関係(筆者作図)



教育者は、子どもの立場と教える立場をふまえて、子どもの生活をよりよくするとともに、自己陶冶も求められる。子どもは、まず個の確立のために、権利が認められなければならない。次に、集団の秩序、生活の向上へと発展させるには、公正、公平、良心、自律などを身につけなければならない。その上で、お互いが譲り合い、赦し合うとともに、監督し合い、悪と闘う緊張関係があって、よりよい協働が成立し、集団としての質も高められる。

また、教育者と子どもとの関係については、双方向のものとして、隣人愛に基づく尊重と、両者の望みと願いに基づく「伝える」「教える」「聴く」「赦す」「愛」「悼み」をあげた。次に教育者から子どもへは、子ども理解と個の尊重、成長阻害要因の除去、果実（褒美）授与、治療と保護、正義をあげた。さらに、教育者と子どもの双方に、個を超越した「よりよく生きる」ことをめざす「内なる声」を記した。

## 7. おわりに

1971年9月、ウクライナのクリミア天文台で、ある観測員が一つの惑星を発見し、コルチャックの名がつけられた。

2022年にロシアのウクライナ侵攻により、両国の戦闘員や一般市民が犠牲となり、コルチャックの国ポーランドが、避難民を多く受け入れている。

こういった状況に鑑み、このタイミングでコルチャックの教育思想を取りあげ、教育者と子どもとの教育関係について考察することを通して、現代の我が国の教育問題を考える示唆を得ようとした。

コルチャックの、これまで紹介されていない作品を原典からひも解くことは、筆者の語学

力の問題でできず、参考にした文献が、日本語で書かれた二次資料である点は否定できないが、図3のように、教育者と子どもとの教育関係を改めて示すことにより、現代の教育問題を考える上での示唆を得ることができたと考える。

今後の課題としては、「内なる声」を明らかにすることと、教育者と子どもが教育関係によりどう変化したかを示すことである。

## 注

- 1) 監督のアンジェイ・ワイダは、父親が陸軍将校で、1942年にソ連の内務人民委員部により銃殺されたこともあり、十代半ばで兵士となり、反ナチ・レジスタンス活動に従事した。後にクラクフの芸術アカデミーに進み、ウッチ映画大学に入学、映画監督の道に進んだ
- 2) 1991年に岩波ホールで上映された映画「コルチャック先生」（監督は上記のアンジェイ・ワイダ）のDVDである。
- 3) 彼の出生について、近藤（2005）が、父親が出生届を遅らせたのではっきりしていないと述べている。当時、ユダヤ人をロシア社会に同化させるため、少年を辺境の地に送り、過酷な軍隊生活を通してキリスト教に改宗させ、ロシアの教育を行っていた。このため、息子の兵役を免れようと出生届を遅らせる者もいた。
- 4) 大澤（2015）によると、サマーキャンプ活動は、夏季3～4週間、都市の貧困層の子どもたちを郊外のキャンプ休暇村・施設に招き、心身の健康・回復をめざして行われた医療的教育活動で、ポーランドでは1880年代から医者によって活動が始められ、20世紀に本格的な展開を見せたのである。
- 5) 「孤児たちの家」の職員構成は、院長1名、ステファニア夫人、教員1名、事務員、管理人、食事係、洗濯係、ボランティアの教員、教育実習生からなる（ジョウゼフ、2005）。教育実習生は約20名、食事付きの学生寮に住み、貧しい学生には奨学金も与えられた。
- 6) 映像の解説は、荒川（2012）、岩波（1991）を参照。
- 7) ヴォイチェフ・ブシヨニャクは、2歳に一家でウクライナからポーランドに移住し、クラクフの演劇芸術アカデミーを卒業後、テレビドラマに出演し、ワルシャワの演劇芸術アカデミーで

講師を務めていたが、政府が全土に戒厳令を敷いてから、フランスに移住し、ポーランドと行き来しながらテレビや舞台に出演している。

## 参考文献

- 荒川麻里 (2012) : 子どもの権利の源流 : 『ヤヌシュ・コルチャック : すべてをこどものために』 . 映画で見る教育学, 2, pp. 28-29.
- アンナ・チェルヴィンスカ・リデル著・田村和子訳 (2021) : 『窓の向こう』, 石風社, pp. 176-210.
- 井上文勝 (2010) : 『子どものためのコルチャック先生』, ポプラ社, 32p.
- 岩波律子 (1991) : 『コルチャック先生』, 岩波ホール, pp. 1-29.
- 大澤亜里 (2011) : サマーキャンプと青年コルチャック ; 子ども集団との初めての出会い. 教育福祉研究, 17, pp. 37-50.
- 大澤亜里 (2014) : コルチャックの孤児院ドム・シエロットの設立と歴史的背景. 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 120, pp. 53-81.
- 大澤亜里 (2015) : コルチャックの思想および養育実践に関する研究の成果と課題. 教育福祉研究, 20, pp. 135-148.
- 大澤亜里 (2022) : 『ヤヌシュ・コルチャックの教育実践』, 六花出版, pp. 3-235.
- 小田倉泉 (2016) : J. コルチャック著『もう一度子どもになれたら』の教育学書としての価値の検討— M. ブーバーによる「包擁 Umfassung」を手掛かりに—. 埼玉大学紀要, 65(2), pp. 213-226.
- 乙訓稔 (2009) : 「子どもの権利論の系譜と展開— エレン・ケイとヤヌシュ・コルチャックを焦点として—」, 実践女子大学生活科学部紀要, 46, pp. 61-71.
- 近藤二郎 (2005) : 『コルチャック先生』, 平凡社, pp. 7-301.
- 柴田千賀子 (2017) : 子ども理解へのナラティブ・アプローチ— J. コルチャック「孤島の王様マチュシ」にみる子ども理解—. 仙台大学紀要, 48 (2), pp. 77-89.
- 新保庄三 (1996) : 『コルチャック先生と子どもたち』, あいゆうびい, pp. 11-170.
- 田中智志 (2016) : 教育関係の存在論— 共存存在と超越性—. 秋田喜代美編『岩波講座 教育 変革への展望 3 変容する子どもの関係』, 岩波書店, pp. 217-242.
- タミ・シエム＝トヴ・樋口範子 (2015) : 作者によるあとがき. タミ・シエム＝トヴ・樋口範子『ぼくたちに翼があったころ』, 福音館, pp. 339-343.
- 塚本智宏 (2002) : ヤヌシュ・コルチャック「子どもの権利」の探求. 稚内北星学園大学紀要, 2, pp. 5-35.
- 塚本智宏 (2004) : 『コルチャック 子どもの権利の尊重』, 子どもの未来社, 134p.
- 塚本智宏 (2011) : ヤヌシュ・コルチャックの子ども・教育思想の歴史的形成 (1890-1920 年代) : “子どもを人間として尊重する” 思想の形成を中心に. 名寄市立大学紀要, 5, pp. 35-47.
- 塚本智宏 (2019) : 『コルチャックと「子どもの権利」の源流』, 子どもの未来社, pp. 14-210.
- 塚本智宏 (2021) : 『子どもにではなく子どもと』, かりん舎, 78p.
- 西川弘志・弘田陽介 (2015) : 歴史から何を学ぶか : J. コルチャックと H. アーレントをめぐる大学教育において. 大阪城南女子短期大学研究紀要, 49, pp. 115-136.
- 樋口範子 (2015) : 訳者あとがき. タミ・シエム＝トヴ・樋口範子『ぼくたちに翼があったころ』, 福音館, pp. 344-350.
- 松浦明日香 (2021) : コルチャックの「子どもの権利」思想の教育学的意義— バイナーの「尊敬の教育学」構想を手がかりに—. 中国四国教育学会 教育学研究ジャーナル, 26, pp. 69-78.
- モニカ・ベルツ著 酒寄進一訳 (1994) : 『私だけ助かるわけにはいかない! コルチャック』, ほるぷ出版, pp. 133-184.
- ヤヌシュ・コルチャック著・サンドラ・ジョウゼフ編著・津崎哲雄訳 (2005) : 『コルチャック先生のいのちの言葉』, 明石書店, pp. 182-205.